

私の一冊

社会福祉学科 永倉みゆき 先生

アーシュラ・K. ル=グウィン作 『ゲド戦記 1～6』

小鹿図書館 : 908/I 95/588 ~ 908/I 95/593 (岩波少年文庫) ほか

子どもは森のようだと感じることもある。

森は様々な生物が集まって形づくられているが、外から眺めているだけではそれらの息吹を感じ取れはしない。近寄って触れて愛でれば、ただの背景として見えていた木々が全く違うものになって立ち現われてくる。子どももそれと同じく、近寄り方によっては、ただ「かわいい」と見えることもあれば、「怖い」と感じられることもあるだろうし「不思議」に思えることもあるだろう。保育の参観をする時、私は“保育”を見るというより、ひたすら子ども自身が面白くて見入ってしまうことが多い。子どもらしさが守られている園を参観した時には、観ている者の心までほぐれてきて、深々と呼吸ができたような気分になり、力が湧いてくる。それは雄大な自然や、よい音楽よい絵と出会った時に、体の奥から力が湧いてくるのによく似ている。最近『ゲド戦記』を読んだ時もそれと同じように、眠っていた心のある部分が活性化したような気持ちになった。この本は何十年も前、学生だった頃から興味がありじっくり読みたいと思っていたのが、忙しさにかまけて手に取る機会を失ったまま、ずるずると時が経つうちに映画化されてしまい、すっかり読む気を失ってしまっていた本だった。

『ゲド戦記』に関しては、様々な読み方が既にあり、自然に対する文明のあり方についてとか、言葉とは名前とは何か、影は何を意味するか等々様々な切り口から論じられているが、今回読んでみて、私の心に一番強く印象付けられたのはゲドではなくその娘テハヌーの育つ姿だった。テハヌー。周りの大人から多くの負の部分を負わされてゲドとテナーの所に来た娘。彼女が来た時、ゲドはもはや大賢人という名からは遠く離れてヤギ飼いとして暮らしを立てており、テナーはアチュアンの大巫女の座を捨てた後、人生も半ばに来てからそのゲドと一緒に暮らしていた。二人は隠者のような存在となってひっそりと暮らしていたのである。しかもテハヌーは幼い時に親にレイプされたうえ、証拠を消すかのようにたき火の中に放り込まれたという悲惨な過去を持つ。その容貌は、顔の半分がケロイド状に焼けただれて右目は潰れ、右手は火傷の後遺症でくっついてカギのようになっているという有様である。彼女は周りの者がじろじろ見るためか人と接するのに臆病になっていて、いつも母の後ろに隠れているような少女であった。

そんな弱者そのものであったテハヌーが、ゲドとテナーの危機にあたり、竜の長老であるカレシンを呼んで救った時、二人はその力に驚いた。が、誰よりも驚いたのはテハヌー自身だったのではないだろうか。彼女自身には自分が持つ力への自覚はなかったのかもしれない。その後、王レバンネンの元に招かれた彼女はしかし、隠れた力が目覚めてきたからと言っても在り方を変えることなく、相変わらず臆病で引っ込み思案なままであった。いやそれとも力があることを知ったことで、その振る舞い方が変わってしなうのは人間だからこそなのであり、竜であるテハヌーにはそのような価値観はなかったのかもしれないが。

『ゲド戦記』6巻の最後でカレシン・アイリアンという伝説の竜と共に空に上がり、3匹のうち最も輝きまた高く舞う竜と化したテハヌーの姿に、私は子どもの中に隠されている可能性の輝きを見せられた思いがした。人間であった時には、誰かの後ろに隠れていた彼女が、本来の竜の姿を現したことにより、伸び伸びと自分を表現することが出来たのだ。そしてそのことは、それが成されるまでは誰にも見えなかったことなのだ。そうやって読み解けば、これはゲド、テナーと養女テハヌーそれぞれが、自分を、また他者を育てる話とも取れ、そう考えると金色に輝くテハヌーを眺めて涙するテナーと、その様子を後にテナーから聞いてうなづくゲドは、さしずめ子どもの自立を見守る親の姿に見えはしないだろうか。日本の昔話の中にも、両親の元に力を持った子どもが生まれて活躍する話はあるが、『ゲド戦記』がそれらと少し違うのは、ゲド自身、テナー自身が苦しみながら“自分自身”になっていく過程もドラマティックに描かれている点である。『ゲド戦記』を読むと、人が人と関わりながら生きていくことの中には、喜びよりも多くの失望や苦しみがあり、幸せの絶頂を感じている時だけでなく、絶望し奈落の底に落ちたような時も、そして最期には誰にも死という終わりが待っていることも含め、そのすべてが豊かに生きているということなのだということがわかる。

子どもが育つ傍らに寄り添う人は、その喜びも苦しみも一緒に味わう仲間になるが、それは容易いことではない。時に子どもの中に潜む宝を、その時の自分には見つけられないこともあるだろう。テハヌーもその外見からは誰がこの子の中に金色の竜が息づいていると予想できただろうか。「教育は、育つものに対する信仰である」と日本の幼児教育の父である倉橋惣三は言った。明らかにには見えないものを見ようとする力、そしてそれを信じる力が、人を育てる上では欠かせない。子どもの森に何を見出すか。それは傍らに立つ者自身の在り方にもかかっている。

今回『ゲド戦記』を読んでこのようなことを考えたのも、私が現在の年齢になってから読んだからなのだろう。できることならばもう一度若い時に戻って読んでみたいものだと思っただ。